

### [Ⅲ 学校訪問報告]

## 高校教育改革の動向と特色ある学校・教育の創造

— 宮城野高等学校・伊奈学園総合高等学校の事例をもとに —

木下雅仁\*・湯沢秀文\*

はじめに

1. 現在までの教育改革の流れ
2. 「新しいタイプの高等学校」のパイロットスクール  
～宮城県宮城野高等学校の事例～
3. 総合選択制高校の創設  
～埼玉県立伊奈学園総合高等学校の事例～
  - (1) 「新しいタイプの高校」開発の経緯
  - (2) 「総合選択制高校」の創設
  - (3) 伊奈学園の総合選択制を支える様々な特徴
  - (4) 総合選択制高校に関する評価

おわりに

#### はじめに

本校は、当時の文部省に認可され平成13年度より国立学校で唯一の併設型中高一貫校として新しい歴史を踏み出した。その背景には、平成7年度より3年間にわたって文部省の研究指定を受け、特設教科「総合人間科」の理論的枠組みと具体的方法論と実践内容を確認し、全国の中等学校の中で最も先進的な教育実践を進めてきたという自他共にその教育的価値と意義を認める大きな社会貢献の歴史がある。また、そこで培われた教育実践の知見は、平成12～14年度にかけて文部科学省の研究指定を受けて研究開発に取り組んでいる「高大の連携を生かした『青年期のキャリア形成』－総合学習の発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発－」というテーマに受け継がれ、様々な特色のある教育プログラムを展開するに至っている。

そのように、全国の中等学校の「パイロット・スクール」あるいは「モデル・スクール」としてますます躍進する本校ではあるが、現状にとどまることなくさらなる躍進を遂げるために、今後の学校改革のビジョン作りの必要性が認識されるようになった。そこで、「10年後の本校のあり方を模索する」という課題が掲げられ、平成13年4月に公選で5名の委員を選び、「将来計画委員会」と名付けられた組織が編成された。当委員会においては、本校が現状として抱える様々な問題点・

\* 教育学部附属中・高等学校教諭

課題点の洗い直しと認識の作業に始まり、学校改革において先進的な取り組みを行っている個別の学校や地方公共団体の実践例の研究や、本校における教育実践の歴史と発展の経緯を踏まえた近未来における本校の在り方像のイラストレーションと具体的プランの提示など、多角的な活動を約半年にわたって行ってきた。当委員会組織は、平成13年8月31日の委員会答申の発表をもって発展的に解消されたが、その思想と理念の一部は同年9月に新たに編成された「急務問題対策委員会」へと受け継がれ、当委員会の活動は一定の成果を残した上でその役割を終えるに至った。

本稿における筆者らの目的は、その将来計画委員会の研究活動の一環として平成13年6月下旬に先進校視察を行った際に得られた情報を整理し、それによって得られる知見をもとに今後の学校改革をめぐる在り方について若干の考察を行うことである。なお、筆者らは先進校視察の訪問先として宮城県宮城野高等学校と埼玉県立伊奈学園総合高等学校の2校を選んだ。東京都品川区で行われている学校選択の自由化に代表されるように、今日の教育改革や学校改革は高等学校のみならず中学校においても顕著であるが、本校が現在取り組んでいる「高大の連携」を意識した研究開発のテーマに相まって、考察の主な対象を後期中等教育課程の充実と改革に絞った。

## 1. 現在までの教育改革の流れ

わが国における教育改革の歴史を紐解いてみると、近代においては明治維新後に維新政府によって推進された教育改革に始まり、大正自由教育運動や戦後教育改革など、どの時代においても社会的要請に迫られて教育をめぐる改革の波が高まっていたことがわかる。現代における教育改革の波は、1980年代半ばに校内暴力やいじめ、不登校など実に様々な「学校荒廃」や「教育病理」と呼ばれるような現象が噴出したことによって、学校や教育制度が「制度疲労」を起こしているのではないかという認識が広範に広がったことに端を発している。こうしたことが背景にあり、教育課題が次々に発生する現象を病理というよりもむしろ、何らかの構造的な必然性を示しているという認識が生まれることになったことから、1984年（昭和59年）8月、中曽根康弘首相は、教育改革のための内閣直属の臨時教育審議会（以下、臨教審）の設置をはかり、大規模な教育改革に踏み切った。これが1980年代後半から今日にまで至る教育改革の幕開けであったと言える。

当時の臨教審は、設置以来、1985年6月の第1次答申、1986年4月の第2次答申、1987年4月の第3次答申、そして同年8月に第4次最終答申を行い、3年間の活動を経て解散した。これ以後は、中央教育審議会、教育課程審議会、大学審議会、生涯学習審議会など、各種の中央審議機関やその他に中央・地方に数多く設置された教育改革のための審議会、委員会、調査会議、さらには民間の教育団体や組織など、多くの組織や機関によって教育改革が提案され、実施されるようになっていった。

こうした各種教育改革の思想に大きな影響を与えたのは、やはり臨教審の答申であった。臨教審の第一次答申では、明治維新後の教育改革と戦後の教育改革とを一連の同じ流れの上にあるとみなし、その発展の延長線上に現代の教育改革の流れがつながっているという立場に立って教育問題を考えていた。以下に引用するように、臨教審の第一次答申では次のように述べられているくだりがある。

明治以降今日までの我が国は、欧米先進工業国に急速に追い付くことを国家目標の一つとし、

教育にもこの目標を実現するための役割が強く求められた。このような考えに立つ制度・施策は、一方では日本人の勤勉性、日本社会の均質性や平等主義などと結び付いて、欧米先進工業国に追い付こうという国家目標を実現する上で、極めて重要な役割を果たした。このことは、評価されなければならない。

他方、このような制度・施策によりもたらされた教育は、欧米先進工業国の進んだ科学技術、制度などの導入、普及を急速に推進するための効率性を重視し、全体としてみれば、その内容、方法などにおいて、画一的なものにならざるを得なかった。戦後教育改革の際にも、個性の尊重や自由の理念が強調されながら、様々な社会的状況のなかで十分に定着するには至らなかった。さらに、近年の我が国の教育は、時代の変化と社会の要請に立ち遅れてきていることを指摘しておかなければならない。

臨教審は、「明治以降今日までの我が国は」と、日本の近代教育の組織原理をまとめ、この教育を「記憶力中心で、自ら考え判断する能力や想像力の伸張が妨げられ個性のない同じような型の人間を作りすぎている」と、切り捨てた<sup>1)</sup>。その上で、今日の「教育荒廃といわれる現象」や「極めて憂慮すべき事態」の原因を、「制度やその運用の画一性、硬直性」に求め、さらに、そのような130余年にわたる教育のありかたを示す視点として、原理のところから改革していかなければならないと、自由化（個性尊重）、多様化、国際化、情報化などのキーワードを提供した<sup>2)</sup>。

国際化と情報化については、学校教育の場に限らず、社会のあらゆる領域においてその必要性が認識され、現在では欠かせない前提条件的な現代的価値となっている。むしろ注目すべきは、「個性尊重」と「多様化」の流れである。「個性尊重」化を指向する教育を実現するために、事業の企画や実施についての規制緩和や自由化が進行し、学校作りや教育制度改革などの多様化を導いた。それによって、1980年代から1990年代にかけて、学校の多様化をすすめる施策が進行したが、制度の多様化は、なによりも後期中等教育に典型的に現れた<sup>3)</sup>。例えば、1988年には定時制・通信制課程における単位制高等学校制度が整備され修業年限の弾力化が進められた。また、1991年4月の第14期中央教育審議会の答申では、改革の視点として「量的拡大から質的充実へ」「形式的平等から実質的平等へ」「偏差値偏重から個性尊重・人間性重視」を掲げ、総合的な新学科や新しいタイプの高等学校の奨励など学科制度の再編成をはじめ、単位制の活用や学校間連携、能力伸張の著しい生徒の例外措置、高等学校入学者選抜の改善など、多岐にわたって具体的な改革が提起されたりもした。その結果、現代は「高校教育改革の時代である」としばしば形容されるように、①総合学科、②単位制高校、③新タイプの高校などの設置が増加し、さらには④特色ある学科・コース・類型の設置や教育課程編成、⑤学校間連携、⑥専修学校や技能審査における学習成果の単位認定などについても着実に導入されつつある<sup>4)</sup>。

こうした高校教育改革の「個性尊重（学校の個性化）」と「多様化」を踏まえた学校づくりの具体例として、ここで宮城県宮城野高等学校と埼玉県立伊奈学園総合高等学校のケースを取り上げる。両者ともそれぞれ独自の設立背景を持ち、また、教育理念を実現している学校として全国から注目を集めている「学校改革先進校」である。次章以下でその具体像を概観することによって、われわれが今後学校改革を考える上で示唆されるものが得られることと期待する。

## 2. 「新しいタイプの高等学校」のパイロットスクール～宮城県宮城野高等学校の事例～

宮城県宮城野高等学校もやはり、1991年4月の中央教育審議会答申、同年3月の宮城県高等学校整備検討委員会最終報告、そして1994年2月の宮城県魅力ある高校作り推進会議報告を受け、1995年4月に設置された高等学校の個性化・多様化を具現化する新しいタイプの高等学校である。この学校には、「単位制普通科」と「総合学科」、さらには東北地方唯一の「美術科」の3学科が用意されている点が他に類を見ない特色である。学校の基本的性格は、「教育活動の全分野にわたって生徒の自主性・主体性に多くを期待し、時代を温かく、思慮深くかつ力強く担う人材が成長し、巣立っていくよう多面的に援助するパイロットスクールである」と自らを位置づけている。当該校における設置学科や定員、選抜方法などについては、以下の表を参照されたい。

開設学科	定員	学 区	推薦による選抜		学力検査等による選抜	第2志望
普通科人文国際コース	80人	仙台北、塩釜黒川※仙台南	40%以内	(1)平成13年3月卒業見込みの者 (2)中学校の学習に意欲的に取り組み、人物が優れている者 (3)推薦された学科・コースに適性、興味、関心を有する者	・調査書と学力検査の結果をもとに選抜する。 ・国語、英語をそれぞれ1.5倍にする。	理数情報コースを志望できる。
普通科理数情報コース	80人	仙台北、塩釜黒川※仙台南	40%以内	・推薦書、調査書、作文、面接をもとに選抜する。	・調査書と学力検査の結果をもとに選抜する。 ・数学、英語をそれぞれ1.5倍にする。	人文国際コースを志望できる。
総合学科	80人	全県一学区	40%以内	・推薦書、調査書、作文、面接をもとに選抜する。	・調査書と学力検査の結果をもとに選抜する。 ・生徒が出願時に申告した2教科について1.5倍する。	人文国際コース又は理数情報コースを志望できる。
美術科	40人	全県一学区	60%以内	・推薦書、調査書、作文、実技の結果をもとに選抜する。	・調査書と学力検査及び実技の結果をもとに選抜する。	人文国際コース理数情報コース又は総合学科を志望できる。

「新しいタイプの高等学校」を作り上げようとして生まれた学校だけに、他に類を見ない多様な特色を兼ね備えている。それらの各要素を体系的に整理することは困難な作業であるが、次の①～②の項目にとりわけ注目し値する特色があるといえる。

### ①全学科単位制（履修単位92、卒業単位80）

生徒の「学び」のスタイルやペースに関しても弾力化と多様化に対応できるように、単位制が導入されている。また、「学年」という単位を解消することにより、形式上の各年次集団は設定され、ホームルームも存在するものの、4年次以降の在籍も認め、原級留置の制度を持たない。

### ②広範な選択科目

上述の単位制が導入されている背景には、生徒の多様な興味・関心に応えるために広範な選択科目を設定したいという事情があった。普通科人文国際コースで66講座、普通科理数情報コースで64講座、総合学科に97講座、そして美術科に33講座が開設されている。また、3年次の科目選択群に「L時間（Learning Time）」と名付けられた時間が設定され、そこで他の学科の講座を一部履修することも可能とされている。

### ③少人数選択に対応

上述のように多岐にわたる選択科目が設定されているのであるが、基本的には5人以上を目安に、受講希望者が少数でも集まれば可能な限り開講する方針で運営されている。筆者らが学校訪問をした際に、たった1名が履修している被服関係の講座の授業を参観した。その受講生はアパレル関係の進路を希望しており、進学対策上、どうしても被服関係の授業を受講することが必要であった。そのたった一人の生徒のニーズに学校が応え、専門家の非常勤講師を外部から招いて講座が開講されていた。

### ④行事の精選と授業時間数の確保

この学校には、修学旅行、文化祭、体育祭、遠足などの行事は一切無い。一コマ一コマの授業自体が生徒の学びの場であり、生活の場であるという考え方から、学校行事を一切無くし、授業時間数を1単位あたり35～38時間確保することが実現されている。開講6年目にして、生徒たちの自主的な要求がわき起り、球技大会が実施されるに至ったが、依然としてそれ以外の学校行事はこの学校には存在しない。

### ⑤出張できない時間割

多様で複雑なカリキュラム上、時間割変更が事実上不可能になる。したがって、この学校では、教員は容易には出張ができない。各教員は自分の持ち時間の全授業に責任を持ち、欠けることがないようにする努力を求められる。

### ⑥放課後の部活動がない

前項目に関連するが、一般に教員の出張の内容を調査してみると部活動に関わる顧問会議や役員会などが多いことがわかり、カリキュラムの関係上出張ができないことから、部活動を実施せず、高体連にも加盟していない。ただし、生徒有志によって組織される「サークル」は多数存在し、1・2年次は校内でサークル自主活動を行う者もいる。当然の事ながら、そのようにサークルへの「所属制限」は設けられておらず、希望しなければサークルに加入しなくてもよいし、逆に複数のサークルに加入して活動することも個人の選択に委ねられている。ちなみに、土曜日の午後や日曜日にはサークルなどの自主活動は行わないことになっている。

### ⑦指導方法の改善

授業時間数を確保すると同時に、ただ漫然と授業の形式的な時間数を確保するのではなく、様々な指導方法の改善を行い、一時間一時間の授業をより魅力あるものにする工夫と努力がなされている。ティーム・ティーチングはもちろんのこと、少人数、習熟度、個別添削、教育機器利用などに積極的に取り組み、授業研究やカウンセリング、あるいは進路指導研究などの校内研修も充実されている。

### ⑧評価研究

生徒たちの「学び」が多様なだけに、評価に関しては研究が進められている。新しい学力観に基づいて、全教科とも日常指導の評価を50%以内の範囲で取り入れている。つまり、学習の評価は、定期考査や臨時考査のみならず課題達成の状況や学習への参加意欲、出席状況などを取り上げ、多角的・総合的に行われている。集団の中での個人の位置、生徒個々について設定した目標への到達度、個人の学習の特徴と傾向なども捉えようと試みられている。

#### ⑨進路指導の重視

この学校では「指導の核は進路指導である」と捉え、系統的な進路ガイダンスを軸に進路指導が展開されている。資料集として「進路達成のための科目選択」「本校生の進路」「宮城野高校の科目選択」「先輩の進路選択」等が刊行され、ガイダンスは担任、年次主任、進路指導部長が連携して行う。また、必要に応じて外部講師も招かれ、生徒が自己の過去と現在を踏まえて未来に迫り、社会的役割についての見通しが得られるような支援が行われている。4年制大学への進学を目指した指導を入念に行いながら、短期大学、専門学校、就職の指導も実施される。

具体的には、進路目標の早期決定と科目選択の指導を兼ねて、1年次前期の必履修科目により集中的に指導される。

#### ⑩長期休業と放課後を活用した実力養成課外授業

実力養成と不得意科目の克服を目指して、長期休業や放課後には、積極的に課外授業が行われる。

#### ⑪土曜日の展開

平成14年4月からは学校週5日制が全国で一斉に導入されるが、それを見越してこの学校では土曜日にはもともと普通教科の授業は行われていない。生徒たちが自分が決めた思い思いの課題に自主的に取り組む「自立の時間」が設定され、その他ゼミナールや集中講座、講演会、総合学習の一部が行われたりする。

#### ⑫転科・転コースの認可

生徒の中で転科もしくは転コースを希望する者が出た場合、試験を実施した上で審議される。

#### ⑬オープン・ホームルーム

1年次はオープン・ホームルーム制が取り入れられており、3学科2コースの混成ホームルームが編成される。2・3年次は学科コースごとにホームルームが編成される。

#### ⑭オープン・レッスンとオープン・カリキュラム

単位制や総合学科の特性を生かして、オープン・レッスン（異年次混成の授業）やオープン・カリキュラム（他の学科・コースと同一科目も選択ができる）というシステムが用意されている。

#### ⑮授業が生徒の社会性構築の場

選択授業を多数設定しているため、2・3年次は教室異動が多くなる。そのことは「マイナス」の現実とならずに、「人間関係の拡大」や「異質なものへの理解と寛容の精神の育成」を導く結果となっている。

#### ⑯自己管理・自己責任重視の指導

この学校では、制服、体操服、通学靴なども定められていない。こまかな点について、生徒は自ら考え判断し、そして行動が取れるようになることが期待されている。茶髪やピアスなど外見に関わる身だしなみに関しても、自己管理と自己責任を重視し生徒に判断は委ねられる。

#### ⑰生徒心得・生徒指導に関する細則は存在しない

上記のことに関連して、この学校では生徒心得や生徒指導に関する細則も存在しない。

⑱ガイダンス・カウンセリングの重視

自分の進路希望を意識し、選択科目を決定した上で時間割を自分の手で作り上げることは生徒にとってはたいへんな作業である。ときに、学校における自分の居場所が見つからなかったりして不登校になるケースも見られることから、月に4回、専門のスクールカウンセラーを招き、教育相談を行っている。

⑲保護者による生活指導を重視

基本的な生活習慣や行動については、保護者による生活指導が行われるように積極的に働きかけている。アルバイトと旅行、そしてバイク通学に関してだけは届出制を取っている。

⑳県のパイロットスクールとして県内外への情報の積極的発信と受信、情報交換の機関

下の表のように、国内外を問わず様々な機関や組織との交流や来校が日常と化していることから、宮城県の「特色ある学校づくり」のパイロットスクールとして、また、宮城県のユニークな教育施策の代表例として、情報受信・発信機関としての機能も果たしている。

県内外との情報の発受信実績 [視察者・見学者・会場提供・学校説明会]

文 部 省	政務次官、高校課長、地方課長補佐、視学官、国立教育研究所
大 学	東北大、宮城教育大、静岡大、信州大、宮城大、東北学院大、筑波大医短
都 道 府 県	北海道、青森、岩手、秋田、山形、福島、栃木、茨城、群馬、埼玉、東京、神奈川、千葉、静岡、山梨、新潟、富山、石川、福井、愛知、三重、和歌山、岐阜、滋賀、京都、奈良、大阪、兵庫、岡山、広島、山口、鳥取、島根、徳島、愛媛、香川、大分、福岡、長崎、宮崎、佐賀、鹿児島島の文教委員、教育委員、教育委員会事務局職員、校長会、教頭会、学校職員等
県 内	宮城県知事、県議会議員、県教育委員、県・市町村教委事務局職員、県立高校長、中学校美術研究会、高校PTA、中学生等
会 場 提 供	仙台市立中学校長会、仙台市立中学校進路指導主事研修会、仙台市立中学校教務主任研修会、高校社会科研究会公民部会、高校美術研究会、東北地区中高英語研究会、宮城の教育何でもトーク、高校音楽研究会、高等学校文化連盟、東北地区国語教育研究協議会
説 明 会	中学校職員への学校説明会、中学生・保護者への学校説明会
大学説明会	東北大、宮教大、宮城大、東北学院大、宮城学院大、東北福祉大、東北工大、仙台大、東北生活文化大、白百合大、東北芸工大、宮農短大、尚絨短大等
報 道 関 係	河北、読売、朝日、毎日、東奥日報、日本教育、朝日ウイール、仙台放送、フジテレビ、東北放送、宮城テレビ、東日本放送、NHK仙台、NHK甲府、FM仙台、リクルート、ポイックス、ベネッセ、小学館、毎日県版特集、学事出版等
国 際 交 流	編入学生・長期及び短期留学生受け入れ（諸外国）、本校から海外へ留学（アメリカ・イギリス・ドイツ・オーストラリア）、アメリカ教育省専門官、アメリカ・ウェズレー大学教授（美術学）、来校訪問団、アメリカ・ルーズベルト高校、韓国・光州教育庁（2団）、パキスタン女性教員海外教育視察団

㉑関係諸機関との連携

大学、高校、中学校、地域、そして行政機関などとの連携を密にし、相互発展のための努力と協力が進められている。

㉒フロンティアタイムとしての総合的な学習の時間

各学科それぞれに「産業社会と人間（総合学科）」「進路設計（普通科）」「美術概論（美術科）」といった進路指導と関連した「生き方・在り方教育」の時間が設けられている。それらに加えて、直接的な体験を重視する体験学習の時間が設定され、フロンティアタイムと名付けられている。名大附中・高で実施されている総合人間科に近いプログラムが展開され、生徒たちはそれぞれに設定した課題や問題意識を調査するためにフィールド・ワークに出かけていき、調査

の成果は発表会で報告される。このフロンティアタイムは年間35時間確保されている。

以上のように宮城野高校では、単位制（普通科）と総合制（総合学科）、そして専門性（美術科）という3つの性格の異なる学科をひとつの学校の中に併存させ、各学科・コース間で連携と交流も取り入れつつ、一つの大きな「新しい学校」像を作り上げている。その精神の根本には、「多様な生徒の学びに関わる興味・関心に応える」という考え方があり、ここに多様な価値観や進路目標を持った生徒たちが暮らす「共同体」を形成していると言えよう。多様な選択講座を同時に複数開講し、複雑なカリキュラムのなかで教育課程を弾力的に運用することは、第一に生徒の「生き方」、「在り方」、そして「学び方」の個性化と多様化を尊重しようとする学校のひとつのアイデンティティーの主張でもあろう。また、それを実現するために、「学校行事全面的廃止」や高体連にも加盟せず「部活動の非設定」など、通常の国公私立の高校では考えられないような大胆でユニークな制度整備も進められ、「学校の在り方として何を最優先として大事にしたいか」との問いに、「生徒の多様な個性的なニーズに応えるための授業（講座）の開設と内容充実」であるとする答えを用意した結果、宮城県内のみならず全国でも類を見ない「新しいタイプの学校」の誕生につながったのである。

現在、宮城野高校は開校7年目を迎えている。新設校にもかかわらずすでに仙台市内屈指の進学校として名を連ね、指定学区内のみならず県内から多くの入学希望者が押し寄せる「人気校」となっている。しかしこの学校は、決して大学受験勉強ばかりを集中的に行う「受験校」ではなく、生徒一人ひとりの「学びの個性」に対応し、自らの生き方・在り方を主体的に選択して、さらに実現していく支援をしっかりと行うという意味での「進学校」なのである。宮城野高校が提示する「新しいタイプの学校」像は、学校作りや制度整備に関わって、学校機能のスリム化と厳選を行うことにより、スクール・アイデンティティーの確立と明確化を行うことの必要性和有能性を示した学校づくりの一例であろう。

### 3. 総合選択制高校の創設～埼玉県立伊奈学園総合高等学校の事例～

#### (1) 「新しいタイプの高校」開発の経緯

1975年に都道府県教育長協議会は「高校問題プロジェクトチーム」を設置した。この背景には、高校生急激な「量的」拡大に対処することによる高校の新增設が、地方財政を圧迫していたので、国に窮状を訴えなんらかの対策を要望していたことと、既存の学校像の固定観念にとらわれない新しいタイプの高校を開発することによって高校教育の「質的」改善を推進しようとする協議会の方針に影響された経緯があった。当協議会は1977年に「高校教育の諸問題と改善の方向」と題した報告を行い、その中で「新しいタイプの高校の開発」を構想して、「普職の一体化を図る高校」など6つのタイプの高校が検討された。

1978年に告示された「改訂高等学校学習指導要領」では、高校教育として共通に学ばせる必修科目を大幅に削減し、多様な選択科目を開講して教育課程の多様化と弾力化を図り、ゆとりある、しかも、充実した学校生活を創造することを目指した画期的な改正となった。ここにおいて政府が「新しいタイプの高校」創設を一定容認する姿勢を表明したことになり、その後全国各地で種々の新しいタイプの高校の構想や設立の動きを後押しすることになった。

都道府県教育庁協議会は、あらためて「高校教育開発研究プロジェクトチーム」を設置し、新し



いタイプの高校の構想について精力的に研究協議を重ねた上で、翌1979年には「研究結果報告書」を発表した。報告書には、「高等学校は一部の選ばれた者を対象とした教育機関であるとするかつての認識から脱皮して、この際発想を転換し、新しい役割や機能、あるべき姿を追求して新しいタイプの高等学校を志向し、真の国民的教育機関としていくことが必要である」として、「学習指導要領の改訂の趣旨を生かして」次の6種類のタイプの高校を検討することが提言された。

- ①単位制高等学校：前章の宮城野高校の事例のように、無学年制で生徒自身の学習計画に基づいて科目を選択履修し、卒業に必要な単位を進路に合わせて修得する。
- ②集合型選択制高等学校：同一敷地内に複数の高校を設置して相互の連携により選択履修の幅の拡大を図る。
- ③全寮制高等学校：イギリスのグラマー・スクールや、アメリカの全寮制私立学校をイメージし、学校と寮との一体的な集団生活を通して知・徳・体の調和の取れた教育を推進する。
- ④単位制職業科高等学校：職業科の高校に普通科など他の学科の卒業生を対象とする専攻課程を併置する。
- ⑤六年制高等学校（中高一貫教育）：中学校と高校との教育内容やカリキュラムを連関させて、教育体系の重複や分断を避ける。
- ⑥地域に開かれた学校：地域社会に学校施設と教育機能を解放し、地域活動に参加して地域から学ぶ。

このような新しいタイプの高校の提言は、高校教育の質的改善を図る新しい高校像を模索していた全国の各組織・団体に大きなインパクトを与え、全く新しい発想に基づいた個性的で特色のある高校の開発を促進する重要な契機となった。また、ここで培われた「新しいタイプの高校」の創造に関わる思想は、周知の通り、その後の臨時教育審議会などの答申や国の高校教育改革の諸施策にもはっきりと反映されていった。

## (2) 「総合選択制高校」の創設

こうした流れの中、首都圏では1980年に千葉県で幕張東・西・北の3高校が、1983年には神奈川県で弥栄東・西の2高校が創設された。いずれも「集合型選択制高校」として、複数の高校を一体的に設置して、相互の交流と連携によって生徒の個性や興味・関心に応じて選択履修の幅を拡充される選択制の導入を実現させた。（幕張東・西・北の3高校は1996年に幕張総合高等学校に統合再編され、さらに新しいタイプの高校に発展的に進化していった。）

埼玉県においては、1983年12月14日に開かれた12月定例県議会において埼玉県立伊奈学園総合高等学校の設置が議決され、翌1984年4月に開校となった。この学校は、3つの高校の集合形態から統合形態を模索した結果、最終的には三校分を一校にした大規模で大幅な選択履修を可能にした「総合選択制高校」として創設された。このシステムでは、生徒一人一人が学年や年齢にこだわらず卒業までの主体的な学習計画を策定して、自分だけの時間割を作成することになっており、個の確立を理念とした選択制と単位制が基本原理とされ、またひとつ全国的に見ても特色のある「新しいタイプの高校」が誕生した。

### (3) 伊奈学園の総合選択制を支える様々な特徴

この総合選択制高校を構築している様々なシステムのうち、特に特徴的なものに絞って取り上げてみたい。

- ①ハウス制：72学級（各学年24学級）規模の巨大な生徒数の中に個が埋没することを恐れ、その弊害を防止するため、学校内に独立した6つの小さい学校を設けて「ハウス」と呼んでいる。このハウスの考え方は、イギリスのボーディング・スクールに見られる伝統的なカレッジ（学寮）のシステムの似通った点も多い。各ハウスはそれぞれのハウス長（教頭）によって経営され、すべての教員はいずれかのハウスに属している。各ハウスでは12ホームルーム（各学年次4ホームルーム）の生徒を入学から卒業まで所属させ、学校行事などで活発に交流させて一人ひとりの活動に充足感と存在感を持たせている。閉鎖的な学級制は採られていない。ホームルームは多彩な生徒の活動の場であり、教科学習は最小限度の必修科目は共通に学び合うが、各自の時間割に定める授業時間毎にそれぞれの専門の教科教室における学習集団に参加して授業を受けてくる。ホームルームはお互いに人間としての在り方や生き方を学び合い、常に集い合う楽しい居場所となり、一人ひとりの学習体系が異なるため成績による序列ができない。この他に類を見ないハウス制は、学校における個の確立と生徒集団の在り方に一石を投じるものとなるだろう。
- ②選択制：この学校では、1年次4単位、2年次16単位、3年次18単位の計38単位が選択科目であり、卒業までに履修する科目が87単位であることから、約半分が選択科目ということになる。そのため、基礎的・基本的な学習の講座や発展的学習の講座、また、各種の専門的学習の講座など多彩な183種類の科目・講座が総合的に展開されている。生徒は1年次に人生設計に基づく学習計画を確立し、個性の伸張をめざして2・3年次の科目講座を選択し、自らのカリキュラムと時間割を編成していく。そのため、2・3年次においては、生徒の数だけ時間割がコンピューターで作成されることになる。このように大幅な選択制は、施設・設備・スタッフおよびそれらに関わる経費・費用に関して、設置者である埼玉県から全面的な支援が保証されていることによりこのような大規模校において初めて実現したものと思われる。
- ③学系制：人文・理数・語学（英語、ドイツ語、フランス語、中国語）・芸術（音楽、工芸、書道）・体育・情報経営・生活科学の7学系が用意され、生徒はまず学系を選択し、さらに自由選択科目を選択していく。選択学習の経験がなかった我が国の高校生にとって、何をどのように選択して学ぶのかの課題は必ずしも容易なことではない。そのためのガイダンスも手探りの状況にある。科目選択時に生徒の側に発生しがちな「つまみ食い」を防止して、系統的な学習を深化させ専門性を磨き、個性の伸張を図るため、学系ごとにかなり多くの必修科目を設定している。しかし、そのことが、生徒の自由な選択の幅を狭め、自分の生き方を探求していく体験学習や外国語や芸術・体育・職業など広い範囲での技能の習熟を求める選択学習を阻害する要因になりかねない。また、必修科目を増加させた平成元年の改訂学習指導要領によって、選択幅を縮小せざるを得ない教育課程の編成となってきた。現在では、全国の多くの高校で類型制や部分選択制を導入し生徒の多様化に対応しているが、学系（類型）における共通の必修科目と個別の選択科目の設定と履修方法の在り方が各高校における特色作りの要となるであろう。

- ④教科教室制：ホームルーム単位で展開する必修科目を除いて、選択科目の授業は各教科の専門教室で実施する仕組みが採られている。6つのハウスの3階部分は各教科の独立した教科棟になっており、国語棟、外国語棟、社会科棟、数学科棟、理科棟、さらには、体育棟や芸術棟などがある。各教科棟は、L L教室やマルチメディア教室のような教育機器を備えた教室、あるいは、実験・実習室、教科の研究室、生徒の個別学習を推進させる学習センターなどで構成されている。生徒は授業時間毎に教科教室へ出向いて授業に参加する。広大な中庭を囲んで配置されている教科棟およびハウス棟や大体育館は、幅9メートルのモール（廊下）で結ばれている。休み時間は次の教室への移動時間として消費され、広いモールは行き交う生徒であふれている。
- ⑤単位制：伊奈学園では学年修了の認定を行っていない。学年の代わりに入学してからの年数を用い「年次」と呼んでいる。各年次で29単位の教科・科目を履修するが、全単位を修得できなくても原級に留め置かれることなく進級できる。ある年次で単位が取得できない教科・科目が出た場合には、次の年次でその教科・科目を再履修または再試験を受けて単位を修得することができる。卒業までに87単位の教科・科目を履修するが、卒業認定に必要な修得単位数は81単位とされており、6単位の差が設けられている。しかし、必修科目は全単位の修得が卒業認定の条件となっている。3年間で卒業に必要な単位が修得できない場合には、不足単位を補うために4年次で必要単位だけを履修することも認められており、単位修得に関しては弾力的な制度が導入され運用されている。
- ⑥推薦入試制度：伊奈学園の入学者選抜には学区制が適用されず、県内各地域の広範囲から生徒が通学しており、出身中学校数はのべ291校に及んでいる。そのように広範囲に点在する中学校から入学希望者を集めるために、この学校では開設当初から推薦入学制を実施している。募集人員の約40%を「学系」ごとに中学校の推薦に基づき面接と適性検査等を実施して選抜を行っている。また、募集人員の約60%を入学させる一般募集では、「学系」と関連なく、普通科として一括した選抜を行い、入学後の進路指導を経て1学期末に学系の選択決定を生徒にさせている。
- ⑦開かれた学校：この学校は、埼玉県の中核都市圏のモデルタウンとして生涯学習都市を目指す伊奈町にあって、多様な学習機会を県民や地域の人々に提供できる高校として発足した。スポーツ施設としてグラウンドを休日に開放したり、県や伊奈町さらにはP T A主催の多彩な開放講座や公開講座を展開して、地域の多くの人々の参加を得て、生涯学習機関としての役割を果たしている。また、「野菜・草花」の園芸科目・講座や「自動車工学」などの技術の科目・講座には地域の専門家を社会人講師として招聘して指導にあたってもらい、大きな実績もあげている。国際交流の視点から、海外にも「開かれた」学校になっており、開設当初からオーストラリア、フランス、そして中国などの海外の高校と交流を実施して大きな成果をあげている。また、授業においては、英語、ドイツ語、フランス語、中国語の外国人講師が活躍し、留学生も積極的に受け入れ日本語講座も開講するなど、多彩な地域社会と国際社会と関わる行事を軸に、名実共に双方向的に「開かれた」学校を実現している。

#### (4) 総合選択制高校に関する評価

先述の通り、伊奈学園総合高校における、芸術や園芸、自動車工学などの地域産業の専門家や、英語、ドイツ語、フランス語、中国語などの外国人講師による授業は生徒を大いに刺激し、地域社会や国際社会に目を向けさせる一助となっていることは想像に易いが、このように人材をはじめ内外の資源を活用した「開かれた学校」の展開という視点は、生徒の個性を生かし自立を促す高校教育の必須の課題の一つであろう。

この伊奈学園総合高校のような総合選択制高校は、岩手県、石川県、岡山県、高知県などで次々に創設されており、普通科の高校であっても学習内容の細分化や専門化を試み、普通科高校ではある意味傍系とされていた諸外国語や芸術、スポーツ、情報・技能教育などにおいても成果を挙げ、幅広い選択科目の実施という工夫が取り入れられている<sup>5)</sup>。

また、普通科高校以外の専門高校にあっては、1983年に埼玉県で6つの学科（電子機械、情報技術、工業デザイン、商業、服飾デザイン、食物管理）を有する新座総合技術高校が設立され、他学科の科目選択も自由にした総合選択制が採用されている。この学校では、学校・学年・学科・学級など、集団教育のもつセクテナ閉鎖性を打破して開かれた学習環境をめざし、硬直化した画一的な教育を排して生徒の進路変化にも柔軟に対応できる弾力的な教育課程の編成と運営を図り、実践的な教育を通して個性を開発することを目標に掲げている<sup>6)</sup>。生徒の主体的な学習活動を重視した学科の枠を越えての選択学習や、学科に関わりなくホームルームを編成し生徒の交流を図るミックス・ホームルーム制、生徒全員に課される現場実習（On-The-Job Training）、社会人講師の招聘など、当時としては先進的な数々の実践を行い、総合選択制の職業高校のパイロット・スクールとなった。

総合選択制の試みは、わが国における集団の枠に嵌め込む教育の属性であった画一性・硬直性・閉鎖性を除去して、生徒一人ひとりの主体性を引き出し自己探求と自己実現に挑戦させ、自己責任の原則を確立させて個性を伸ばし自立を促す教育の在り方を追求した実践であった<sup>7)</sup>と評価されるに至っている。

#### おわりに

以上のように本稿では、宮城県宮城野高等学校と埼玉県立伊奈学園総合高等学校における生徒の個性化と多様化に対応しつつ、魅力ある「新しいタイプの学校」を創造している事例を概観してきた。この2校に共通するカリキュラム上のシステムは、「単位制」と多岐にわたる「選択制」であった。このようにシステムは、個々人の幅広い学習を可能にしたり多様な生き方を許容したりするよりも、結果として近代社会にふさわしい個別化された「効率的」履修システムとして機能している<sup>8)</sup>という指摘もあり、それに対する明確で説得力のある評価を下すにはさらに多様な事例を対象として考察を進めることが求められよう。

確かに、高校教育改革の言説は、「個性化」、つまり、「個別化」、「多様化」、そして「弾力化」といった要素の尊重を謳っている。ところが、私見であるが改革の現実はずしもこれと一致していない。一連の改革は一部の公立学校の活性化を意図したという色彩が強い。いわゆる典型的な公立の「進学校」や私立高校でこうした改革が実現している例が少ないことや、宮城野高校や伊奈学園

総合高校のように「新設校」で「新しいタイプの学校」作りが進められるケースが多いこと、さらには、いわゆる「教育困難」な「職業高校」において現状打破を期して総合学科に再編するケースなどが多々見られる事実は示唆的である。菊地英治は次のように述べ、高校教育改革の進行状況を評している。「高校の『階層化』や高等教育機関の機能分化をつき崩すというよりも、市場メカニズムの中での微細な差異をめぐる競争に取り込まれる可能性が大きい。これまでの学校の〈規律〉はいわば『自由化』の方向へと少しずつ推移してきたが、既成の〈知識〉の正当性や社会や教育の仕組みそのものに根本的な変化を迫るものではなかった。高校での『自由選択制』が『少数科目の大学入試』に有利に作用するとはいえ、それは〈知識〉そのもののあり方を問い直すものではないのである。したがって、現在までの高校教育改革は、近代という枠の中で表向きは『多様化』というソフトな衣をまといながら微調整的に進行していると概括してよい<sup>9)</sup>。」

菊地のようにはっきりと評価を下してしまうことは時期尚早な感がある。こうした高校教育改革に関わってその評価がまだ定まっていない以上、今なおリアル・タイムで進行する高校教育改革の流れを見守りつつ分析を進めていくことが求められると筆者らは考えるからである。少子化社会の進行、青年文化の変容、労働市場・経済社会の変化、高等教育における入試改革など、時々刻々として現代社会は変容しており、常にそのような社会的文脈に沿って、そうした現実の社会変化との相互作用の中で高校教育改革は把握されるべきであり、個々の学校における改革の動向や高校教育政策だけに注目していたのでは不十分であろう。今後更に高校教育改革研究が進められ、過去から現在にかけて行われてきた改革の評価と分析が絶えず行われていくことを期待したい。

蛇足になるが、筆者らの学校訪問の際に宮城野高校で対応してくださった学校関係者が、「変わったこと（他に類を見ないような取り組み・割り切り）を行うことは（学校の）個性ではない」という内容の意見を文部省（当時）から寄せられたというエピソードを聞かせ下さった。しかし、行政側の危惧とはうらはらに、開校7年目を迎えますます入学希望者は増え続け、また、高等教育との連結の意味での進路決定状況（進学状況）も仙台市内のベスト3にランクすると評されるようになった現状から判断すると、部活動や学校行事が一切無いなどの大胆な諸システムを含めて、生徒の「個性化」や「多様化」にしっかりと応えてくれる宮城野高校のアイデンティティーが広く県民に理解され、また、一定評価されていることは明らかである。宮城野高校における独自の学校作りと教育の創造の行方には、今なお陰りは見られない。また、伊奈学園総合高校においては、当校から名大附中・高に中高一貫校研究の目的で学校訪問されたことがある旨を聞かされ、さらには、ごく近い将来当校は埼玉県教育局から指定され中高一貫校へと発展的に移行・再編する予定があることについても聞かされた。それによって「総合選択制の中高一貫校」という中等学校が誕生することになる。そして、この学校の教育改革の動向は、今後もわが国の中等教育研究に大きなインパクトを与え続けることであろう。

このように学校改革においては、一度何か改革を行って普遍的な在り方や価値が生み出されるわけではなく、常により深化した学校や教育の形を模索し、とどまることなく次のステージを求めて進展していくことが期待される。宮城野高校や伊奈学園総合高校の実践例からも示唆されるように、時代や社会の要請を敏感に分析・把握しながら、21世紀型のスクール・アイデンティティーを主張することや、教育課程の開発にとどまらない様々な先進的 school システムの開発と導入などを進めることの重要性を本校においても早急に認識すべきであろう。

（木下雅仁）

## 【註】

- 1) 尾崎ムゲン『日本の教育改革』中央公論社、1999年、225頁。
- 2) 同上書、225頁。
- 3) 同上書、227頁。
- 4) このことは、「高等学校教育の改革に関する推進状況」（文部省、平成8年1月）などの資料から知ることができる。
- 5) 中等教育研究センター紀要第1号（名古屋大学大学院教育発達科学研究科、2001年）において、岡山県の岡山市立後楽館中・高等学校の学校づくりの実践が報告されてあるので参照されたい。
- 6) 耳塚寛明・樋田大二郎編著『多様化と個性化の潮流をさぐる』学事出版、1996年、20頁。
- 7) 同上書、西本憲弘「高校教育改革の潮流」、21頁。
- 8) 同上書、菊地英治「高校教育改革の『最前線』」、33頁。
- 9) 同上書、菊地英治「高校教育改革の『最前線』」、37頁。

## 【参考文献】

- オリヴィエ・ルブール著、石堂常世・梅本洋訳、『学ぶとは何かー学校教育の哲学ー』勁草書房、1984年。
- 尾崎ムゲン『日本の教育改革』中央公論社、1999年
- 苅谷剛彦『大衆教育社会のゆくえー学歴主義と平等神話の戦後史ー』中央公論社、1999年。
- ぎょうせい編『臨教審と教育改革』第1集、ぎょうせい、1985年。
- 埼玉県立伊奈学園総合高等学校『平成13年度学校要覧』2001年。
- 埼玉県立伊奈学園総合高等学校『選択ハンドブック 平成13年度版』2001年。
- 埼玉県立伊奈学園総合高等学校『学系案内 平成13年度版』2001年。
- 埼玉県立伊奈学園総合高等学校『学園通信シャトル』第62号、2000年。
- 埼玉県立伊奈学園総合高等学校『学園通信シャトル』第63号、2000年。
- 埼玉県立伊奈学園総合高等学校『学園通信シャトル』第64号、2001年。
- 全国教育新聞社『全国教育新聞』埼玉県版、2001年6月15日号。
- 埼玉県立伊奈学園総合高等学校『学校案内2001』2001年。
- 埼玉県立伊奈学園総合高等学校PTA・後援会広報部『伊奈学園PTAだより』第49号、2000年。
- 中井浩一『高校が生まれ変わるー教育現場からの報告ー』中央公論社、2000年。
- 樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版、2000年。
- 藤田英典『教育改革ー共生時代の学校づくりー』岩波書店、1998年。
- 耳塚寛明「総合選択制高校の選抜機能」牧昌見ほか『高校教育改革モデルの浸透可能性に関する実証的研究』国立教育研究所、1994年。
- 耳塚寛明・樋田大二郎編著『多様化と個性化の潮流をさぐる』学事出版、1996年。
- 宮城県宮城野高等学校『平成12年度学校要覧』2000年。
- 宮城県宮城野高等学校『宮城野高校の教育 第2集』1999年。
- 宮城県宮城野高等学校『宮城野高校の教育 第4集』2001年。